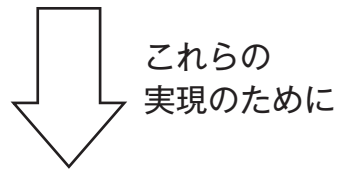


地方の周産期医療を守る
画期的なシステム
「大学病院群を中心とした
出産支援連携体制」



目指した医療体制

- ・少ない医師が効率よく働ける
- ・地域格差なく高レベル医療の提供



医療施設の役割を分担

この連携体制では、大学病院が福井市内の基幹病院と「大学病院群」を形成し、周辺の病院を大学病院群のサテライト施設として位置づけ、どの医療機関でも均一な医療提供ができるようになっています。

その中でも大学病院は、加賀平野から福井県内、そして京都府北部地域までをカバーする産婦人科医療ネットワークの最終責任施設として、高度な医療を担当しています。

— 小辻教授の講演より —

健診は福井社会保険病院で

出産は大学病院など 県内の医療機関で

地域住民の理想とは?
住民にとっては、近くにあって、なおかつ高度な医療を受けられる病院が理想です。つまり「自宅の隣が大学病院」ということです。そこで、毎日の通院は近くの病院に行き、安全で高度な医療を受ける必要があるときは、大学病院に行くという、現在の周産期医療の連携体制を構築しました。

奥越地域をカバー
様々な要因による産婦人科医の急激な減少等により、奥越地域での分娩ができなくなったため、この地域を大学病院でカバーしてほしいという要請がありました。

住民の理想の形に近い、 連携体制を確立

た。これは、より理想に近い形ではないでしょうか。その後、この連携体制は全国から注目されるようになりました。

理解と覚悟が必要

奥越地域の現状として、皆さんが社会保険病院を通さず、直接大学病院等へ来られているため、福井市内の大学病院群に大きな負担がかかっています。

福井県の高度な周産期医療連携システムを維持し、社会保険病院で分娩が再開されるためには、少なくとも奥越の妊産婦全員が社会保険病院を受診するという、皆さんの理解と覚悟が必要です。



勝山で 子どもを産みたい!

2月16日(木)、すこやかににおいて『安心して出産・育児できる環境の確立をめざして』というテーマでシンポジウムを開催し、勝山市が現在抱える出産における様々な課題について意見交換等が行われました。

勝山市では、平成24年度から新たに妊婦に対して奨励金を支給するなど、出産・育児支援を広げていきます。

シンポジウムの 基調講演から



講師
福井大学医学部附属病院
産科婦人科 小辻 文和 教授

日本の産婦人科事情

過酷な状況下の中で
産婦人科医は、いつ始まるか分からない出産のために、24時間365日拘束されるといふ過酷な状況下で勤務しています。日本の妊産婦や乳幼児の死亡率が世界で最も低い国であることから、日本の産婦人科医はそのような過酷な中でも「世界最高レベルの医療」を求められています。
産婦人科医が急激に減少
日本の産婦人科医の数は、平成6年から平成16年まで減少傾向にあります。



小辻教授による講演の様子

の間で見ると、日本の医師数は年々増加しているにもかかわらず、産婦人科医の数は減少しています。
小規模施設に分散
このように産婦人科医が少なくなっているにもかかわらず、多数の小規模施設に医師が分散していることで、人手を必要とする突発的な事態が起きた場合の対応がとれず、「妊婦のたらい回し」のようなことが起こってしまうのです。

勝山の産婦人科事情

市内で産めない
市内で唯一、産婦人科がある福井社会保険病院(以下、社会保険病院)では、利用者数の減少や医師不足の影響で、平成19年4月から出産ができない状態です。
そのような中で、福井大学医学部附属病院(以下、大学病院)産科婦人科の小辻文和教授が、勝山の出産医療体制を守るために、医療機関の役割分担を図る体制をつくりました。(次項参照)

福井県の産婦人科事情

全国最悪から全国トップへ
平成9年に全国ワースト1であった県内の周産期(妊娠22週から出生後7日未満の期間)死亡率が、平成20年には約3分の1まで改善され、全国最小となりました。
また、近年は、急患搬送先確保のための依頼回数も全国最小で、たらい回しがほとんどありません。